

みなさん、おはようございます。

今日から12月。昨日、世界中の教会が**待降節の第1主日**を迎えました。

キリスト教の暦では、**新しい一年の始まり**でもあります。

生徒玄関、聖堂、そして体育館のステージにも、アドベントクランツの一本目の光が灯されています。

待降節は、イエス・キリストの誕生を迎えるために**心を整える4週間**です。

日本ではキリスト信者は多くありませんが、それでも多くの人がクリスマスを祝います。それは、この季節が「いのちの尊さ」や「誰かを思いやる心」を静かに思い起こさせてくれるからです。

本校が大切にしているクリスマスも、まさにその**“心のあり方”**に触れる大切な時間です。

先週から朝礼で読まれている聖句、ヨハネ1章5節「**光は暗闇の中で輝いている**」。

光は希望、暗闇は不安や悩みの象徴です。

私たちは、時として、自分の心に暗闇をつくってしまうことがあります。

思うようにいかない時、孤独を感じる時、道が見えなくなる時。しかし、そんな時にそっと差し伸べられる優しさや励ましは、大きな光になります。

先週の聖句の紹介で、数学科の藤井先生は、「無理に太陽のように輝かなくてよい」と語ってくださいました。

月は自ら光を放たなくても、受け取った光を静かに返し、太陽が照らせない場所に光を届けます。私たちも同じです。

誰かを照らす前に、まず自分が光を受け取ること——休むこと。心を整えること。

その積み重ねが、誰かに寄り添う優しさになります。

今日、もう一つ、皆さんに分かち合いたいことがあります。

私は、アメリカで音楽セラピーのボランティアをしていた頃、重い障害を持つ子どもたちと過ごしました。言葉も身体の動きも自由にならない子どもたちです。

その中に、生まれてからずっと眠り続けていた2歳の男の子、Shawn いました。

クリスマスイブの日、彼の部屋に入った私は息をのみました。

Shawn が大きな瞳を開けていたのです。透き通る青い瞳でした。

その時、機械の警告音が鳴り、部屋に入ってきた看護婦さんも、目をぱっちり開いているShawn を見て驚き、機械の数値をチェックし始めました。これは、彼の脳に何か変化がある証拠だからです。

外では静かに雪が降っていました。

私は用意していた「Silent Night」を、いつもと同じように彼の耳元で歌いました。

すると、動かないはずの小さな指がぴくぴくと動き、歌い終わった時には、まばたきもしない瞳から静かに涙が流れていました。言葉も表情もなくても、Shawn は確かに応えてくれました。

私はその時、いのちの光は、力や言葉を超えて、心と心を結ぶのだと感じました。

その十日後、Shawn は天国に召されました。

彼は、弱さのただ中にあっても光は現れ、誰かの心を動かすということを私に教えてくれた、神様からの大切な贈り物でした。

本校の教育目標「光の子として歩みなさい」は、強く完璧に輝きなさいという意味ではありません。太陽のようでなくてよいのです。月のように、受け取った光をそっと返す人であればいい。

私たち一人ひとりの命の光は、大きさではなく“かけがえのなさ”で輝きます。

暗闇があるからこそ、その光はいつそう鮮やかに見えるのです。

今日から、冬休みまで毎朝、捧げる「待降節の祈り」には、“小さな愛の業を行って準備したい”とあります。大きなことではなくていい。そばにいる友だちにかける一言、そっと気にかける眼差し——そのひとつひとつが、アドベントクランツの一本の光のように、周りをあたためる優しい灯りになります。

12月13日のクリスマス会は、聖霊学園高校にとって一年で最も大切な行事の一つです。地域の皆様と共に、クリスマスの希望と喜びを分かち合う特別な日です。全校生の「ハレルヤコーラス」が体育館に響き渡り、光に満ちた祈りの時間をつくり出します。

ご家族やお知り合いの方々にも、ぜひお声がけしてください。

本当のクリスマスの意味に触れ、心が温まるひとときを共に過ごす機会となりますように。

それでは、今日から12月24日までの待降節の日々、

皆さん一人ひとりに宿る“命の光”が、誰かの暗闇に優しく寄り添う光となるよう願っています。

希望と喜びと愛に満ちたクリスマスを迎えられますように。

終わります。